

# 西日本の養蚕信仰

2019.6.16

於 浅井歴史民俗資料館

シルク民俗研究会 カイコローク

中森 あゆみ

- 1) はじめに
- 2) 絹の歴史年表
- 3) 西日本での養蚕と信仰の広がり
  - ・ 養蚕を伝えた渡来人
  - ・ 西陣の役割
- 4) 西日本の信仰の特徴
  - ・ 丹後・丹波の事例
  - ・ 福井県での事例
  - ・ 滋賀県での事例
  - ・ 鳥取・島根の事例
  - ・ 四国の事例
  - ・ 九州の事例
- 5) 歌でつなぐ蚕への祈り
  - ・ 蚕数え歌
  - ・ 蚕囃子
- 6) おわりに

## 1) はじめに

関西に生まれて北陸で暮らす私が蚕神に出会ったのは初めて秩父に訪れ、岩根神社の本殿裏に祀られていた石像に出会ったのが始まりでした。右手には繭玉、左手には桑の木、蚕蛾の宝冠を付けた像がいったい何の信仰の元に祀られていたのかも知らずに、神像と目が合った瞬間に彼女の虜になってしまった自分に気づきました。この衝撃的な出会いから、全国の蚕神・蚕仏を探す事にしました、沢山のデータが集まる事で、この蚕に特化された神様はどういう経緯で生まれ、民衆に支持され、そこにはどんな祈りがあり、習俗があったのかを知り得、産業と人類の最古ともいえる家畜と人の暮らしの歴史が垣間みえてくると事と思います。

今回は関西の養蚕信仰を考察しながら、日本の養蚕事情と養蚕が人々の暮らしにどう関わり、蚕を育て守り継がせていくためにどのような祈りや習俗があったかを実例を元に紹介していきたいと思います。



## 2) 絹の歴史年表

紀元前3000年頃	クワコを家畜化し、養蚕が中国で始まる
紀元前2750年頃	浙江省の遺跡から平絹片、絹帯、絹縄などが出土
紀元前1000年頃	中国の宮廷内だけで秘密裏に行われていた養蚕を一般農家にもさせ、宮廷にすべて納めさせていた
紀元前221年	秦による中国統一、養蚕技術の国外への持ち出しが禁じられる。日本には統制される前に養蚕が伝播したと考えられている
紀元前200年頃	福岡の有田遺跡より平絹が出土、当時の中国の絹織物とは織り方が異なることから日本列島特有の絹織物が既にあったと考えられている
紀元前108年頃	朝鮮半島に養蚕が伝播
195年	百済から蚕種がもたらされる
238年	邪馬台国の女王卑弥呼が中国の魏王に斑絹を贈りその返礼として多数の高級絹織物が下賜される
280年	呉王朝滅亡
283年	秦氏が養蚕と絹織物の技術を伝える
603 (推古11年)	秦河勝、太秦に広隆寺を創建
701 (大宝元年)	大宝律令制定、織部司を置き、錦、綾、羅、紬の製織を掌らしめる
奈良時代	全国的に養蚕が行われるようになり、租庸調の税制の庸や調として、絹製品が税として集められた
1048 (永承3年)	織部司の織手が私的に綾錦らを織るのを禁止する
1229 (寛喜元年)	京中、織手、唐綾を織出す
室町～安土桃山時代	中国から糸に抛りかける技術が伝わる
1467 (応仁元年)	応仁の乱が始まり、大舎人の織手ら境や山口などへ離散する

- 1480年代（文明末） 織手ら京都の西軍の本陣跡一帯に戻り、練貴方、大舎人座らの機織集団を形成、「西陣」の名称の起こりとなる
- 1513（永正10年） 大舎人座、旧来の由緒と特権を承認される。
- 1548（天文17年） 大舎人座三十一家、特権と保護を与えられる。
- 1573（元龜2年） 大舎人座の六家、内蔵寮の織物司を命ぜられる。
- 1582（天正10年） 明様織法のならって堺（錦、唐織、金蘭、紗、紋紗、金文紗、緞子、襦子等織る）西陣（襦子）で制作活発化
- 1591(天正19年) 中国の織工、境で縮緬、金蘭、緞子、襦子を織る
- 1603（慶長8年） 江戸幕府成立
- 1604（慶長9年） 輸入白糸の糸割符の制度はじまる
- 1720~1722（享保5~7年）丹後に縮緬の技術が流出する
- 1738（元文3年） 桐生に西陣技術伝う（紗綾・縮緬）
- 1752（宝暦2年） 丹後より縮緬が長浜にも伝わる。地方織絹の京都進出著しくなる。
- 1770（明和7年） 上垣守国が養父に陸奥国伊達郡福島から蚕種を持ち帰り、丹後・丹波に養蚕が普及する
- 1802（享和2年） 上垣守国 養蚕秘録を著す
- 19世紀 ヨーロッパで微粒子病が流行る
- 1861年~1865年（文久年間）長野県南安曇地区風穴を利用して蚕種保存
- 1872（明治5年） 西陣からヨーロッパに留学生を派遣し、ジャガードを始めとする近代織物技術を導入
- 1909（明治42年） 中国を追い抜き世界一の生糸輸出国になる
- 1929（昭和4年） 世界恐慌
- 1941（昭和16年） 太平洋戦争により、生糸の輸出が途絶える
- 1950（昭和25年） 再度のピークを迎えるが1935年の半分以下、その後養蚕農家は徐々に減っていく

### 3) 西日本での養蚕と信仰の広がり

#### ・養蚕を伝えた渡来人《秦氏と東漢氏》

日本書紀の記述に応神天皇14年に弓月君が百済から来朝して窮状を天皇に上奏し、百二十県の民を率いての帰化を希望していたが新羅の妨害によって叶わなかった、応神天皇16年8月に新羅による妨害の危険を除いて弓月君の民の渡来を実現させるため、平群木菟宿禰（へぐりのつくのすくね）と的戸田宿禰（いくはのとだのすくね）が率いる精鋭が加羅に派遣され、無事に弓月君の民が渡来し金銀玉帛を献上しました。

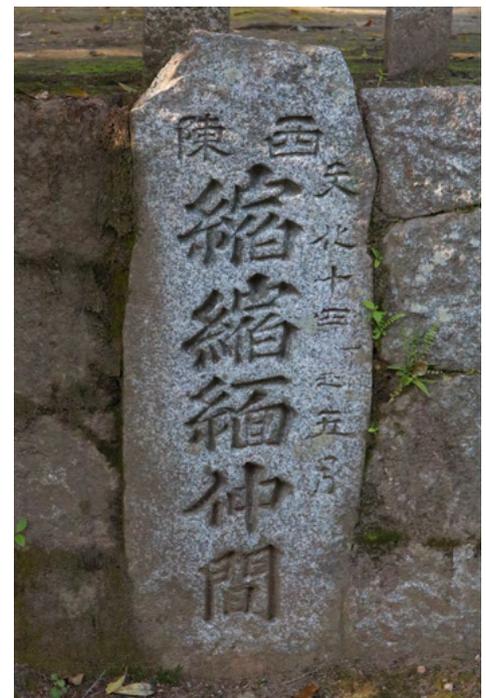


帝は大倭朝津間郡を下賜、養蚕と織絹に従事させて朝廷に織った絹を献上するようにと命じました。その後帝は「秦氏が献上した絹綿は、柔らかくて暖かいため、身体にぴったり合う。」といい、弓月君の子普洞王（ふどうおう）に波陁の姓を賜ったその絹織物は柔らかく「肌」のように暖かいことから波多の姓を賜ることになったとされます。

弓月君の孫の秦酒公（はたのさけきみ）は一族が分散し弱体化が進むのを憂い、雄略天皇の詔を受けて、秦氏の伴造として各地の秦部・秦人の統率者となります。

庸調として献納した絹布が山積みになったため、その賞として太秦(禹都萬佐)の姓を賜ったと記紀に記されています。

養蚕によってもたらされる絹は古代では大変貴重な品で、特に冠位十二階のように着物によって身分が決まる制度を導入したことにより、貴族がこぞって絹の衣を求めるようになり、秦氏の絹織物は京都の西陣織へと受け継がれ、秦氏ゆかりの綾織物職人集団、「大舎人座」となっています。京都市右京区太秦にあります木嶋坐天照御魂神社本殿東（右手）にあるのが蚕の社といれる蚕養神社です。御祭神は保食神、蚕の神、木花咲耶姫命です。秦氏が養蚕、織物の技術者を連れて太秦に来た時に織物の祖神を祀ったのが蚕養神社の始まりと伝わります。





秦氏と同じ時代に渡来してきた一族に東漢氏（やまとのあやうじ）があります。日本書紀の記述には、応神天皇20年秋9月 東漢氏の祖阿知使主（あちのおみ）とその子都加使主（つかおみ）は部下17県の人達を連れて我国に帰化し、大和國柅隈に居住を與られ同天皇37年の春2月兩人を勅使として呉國より縫工女（きぬぬいひめ）を連れてくるようにとの命をうけます。

阿知使主たちは高句麗国に渡ってから呉に行こうと考え、道案内の者を高句麗に以来、高句麗の王は久礼波（くれは）・久礼志（くれし）の二名を先導者として随伴させ、阿知使主たちは無事呉に行く事が出来ました。

呉の王は工女、兄媛（えひめ）・弟媛（おとひめ）、呉織（くれはとり）、穴織（あなはとり）の四人の婦女を倭国に与えました。

倭国にむけて帰ってきた阿知使主一行が筑紫に着いたのが命をうけてから4年後の二月でありましたが、その月に応神天皇は明宮で崩御された後でした。

この時、宗像大神が工女たちを欲しいと言ったので、兄媛（えひめ）を献上。これが今筑紫国の御使君（みつかいのきみ）の祖になったと伝わります。

弟媛、呉織、穴織の三人を連れて阿知使主達一行は津の国に向かい、武庫（むこ）より上陸、応神天皇はすでに崩御されていたので、大鷦鷯尊（おおさざきのみこと）に献上した。彼女らは呉衣縫（くれのきぬぬい）・蚊屋衣縫（かやのきぬぬい）の祖先である。

大阪府池田市内や兵庫県西宮市内には、この機織伝承ゆかりの旧跡が各所に残されています。

池田市の呉服神社には呉服、綾羽の姉妹がこの地に渡来した後、昼夜怠ることなく布帛（ふはく）を織り続けたという伝説があり、呉服が祀られていて、本殿の横には呉服が葬られたとされる塚「姫室」がひっそりと残されています。



池田市の市章には、織り姫たちが糸を染めるために水をくんだ井戸「染殿井」と織物に使った糸巻がデザインされている。

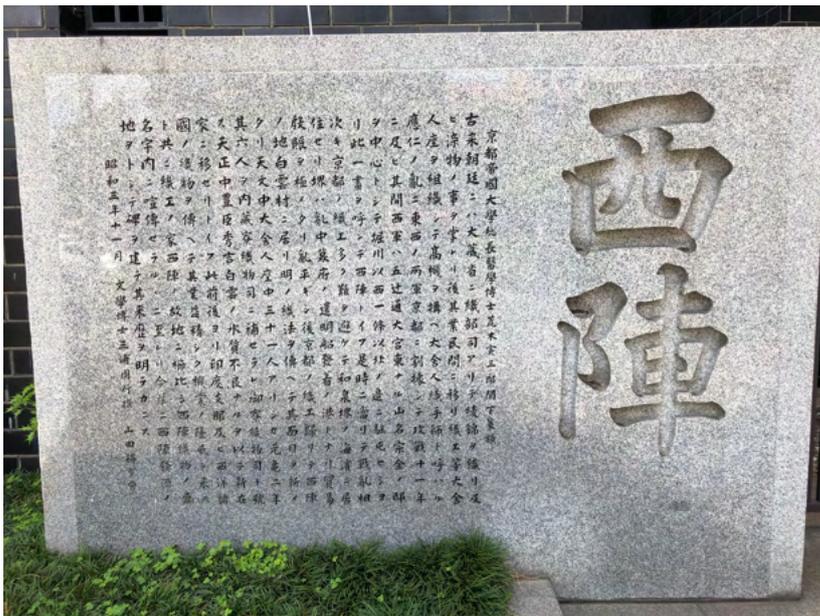
池田市綾羽には穴織が祀られた穴織宮伊居太神社があります。





兵庫県西宮市の松原天満宮には漢織、呉織が糸を染めた伝承の池が残っています。

## ・西陣の役割



飛鳥時代から奈良時代を経て平安京への遷都が行われると、朝廷では絹織物技術を受け継ぐ工人（たくみ）たちを織部司（おりべのつかさ）という役所のもとに組織して、綾・錦などの高級織物を生産させました。織物の工人たちは現在の京都市上京区上長者町あたりに集まって、織部町といわれる町をかたちづくっていたといわれます。

平安時代中期以降になると、こうした官営の織物工房は徐々に衰え、工人たちが自分たちの仕事

として織物業を営むようになります。彼らは織部町の近くの大舎人（おおとねり）町に集まり住み、鎌倉時代には「大舎人の綾」「大宮の絹」などと呼ばれ珍重された織物を生産、大陸から新しい技術も取り入れてすぐれた織物を作っていました。室町時代には、大舎人座（おおとねりざ）という同業組合のようなものを組織し、朝廷の内蔵寮（うちのくらのつかさ）からの需要に応えながら、一般の公家や武家などの注文にも応じようになります。

この頃日本で作られた生糸は質が悪く、上等な着物には中国より輸入された生糸を使っていました。

室町時代中頃、京都の街を舞台に東軍と西軍が争う応仁の乱が11年間も続き、多くの職工たちが和泉の堺などに移り住みましたが、戦乱が終わると西軍の本陣であった大宮今出川付近で織物業をする工人たちが集まりました、そこから西陣が織り物の名前の由来になりました。

西陣のほとんどが京都市北区紫野今宮町の今宮神社の氏子集落地域になっていますので、必然と地域の鎮守社に織姫を祀りたいという思いが湧き上がり、織姫社に祖神である栲幡千千姫命（たくはたちぢひめのみこと）をお祀りされるようになりましたが、それがいつの時代にどこから勧請されたかの記録は神社には残っていないということです。



応仁の乱が終結した11月11日を「西陣の日」と定め、昭和44年より西陣織に携わる人たちが織姫社の神前に集い、織物の祖神に感謝を捧げ西陣の繁栄を祈願する祭祀が行なわれてきましたが、今は節目の年だけになってしまったということです。

今現在今宮神社の織姫社では8月7日に七夕

祭りが行われています

すが、織物の願い事というよりも、芸事の神様としての祈りの意味合いが濃くなってきているということです。

## 4) 西日本の信仰の特徴

### ・三丹地方（丹後・丹波・但馬）の事例



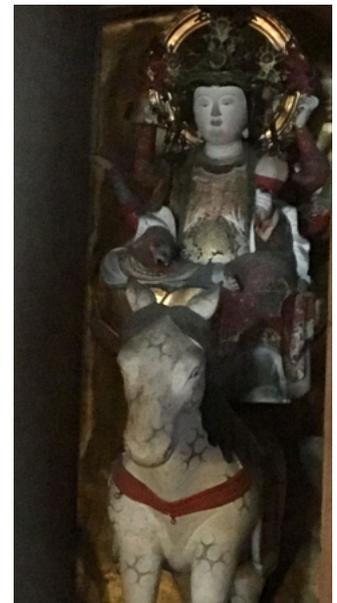
京丹後市峰山町の金刀比羅神社 境内社の木島神社は文政13年（1830）に、山城国（現京都市）の養蚕の神の木島神社から、地元のちりめん織業者らにより勧請され、その後糸商人や養蚕家たちの手によって、天保2年（1831）と弘化3年（1846）に猫像が奉納されています。今でも峰山の丹後縮緬業者はこの金刀比羅神社より毎年護符を受けに行くということです。



京都府綾部市惣持院



福知山市大江町清園寺



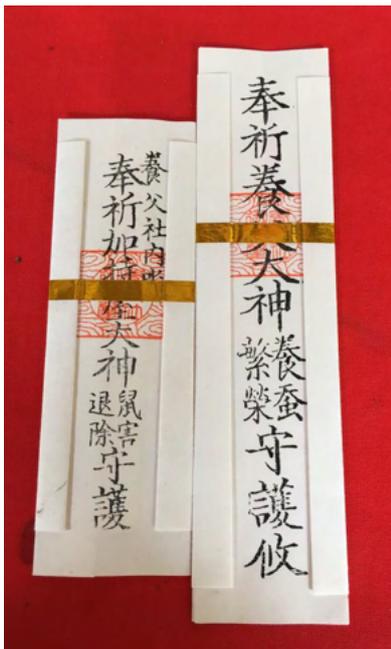
与謝野町西光寺

京都府の日本海側丹後地域には沢山の養蚕に関わる神社仏閣があります。寺院には馬鳴菩薩が安置され、縁日には養蚕の護符が頒布されていました。



与謝野町加悦の実相寺には金色姫が祀られて寛政四年(1792)に茨城の蚕影神社(桑林寺)より勧請されたと伝わります。十月に金色姫のお堂で法要が営まれ、護符が領布されるということで、与謝野町の丹後ちりめんに携わる方がお参りされる

兵庫県養父市に鎮座します養父神社境内社  
迦遲屋神社は御祭神奥津彦命、奥津姫命で



この辺りの祖神として鍛冶工の人たちの信仰があった神社でしたが、その後火除け、ネズミ除けと時代に



より信仰形態が変わり、養蚕の神様として信仰されて「猫の宮」と呼ばれるようになります。祠にある石を「猫石」と呼び持って帰り蚕室に置き、養蚕が終わるとまた石を奉納する習俗があります。

丹波市青垣町東芦田に鎮座します高座神社の境内社「蚕の宮」には馬鳴(ばなり)神が安置されています。江戸時代にこの辺りに住む人が養蚕を守護する保食神の夢を見て、信州上田より蚕種を譲り受けた時に、馬鳴菩薩も神社に勧請されました。神仏判然令が発令されて呼び方が変わりましたが、昭和まで初午の日に護符が領布され、沢山の養蚕農家がお詣りにこられていたということです。



## ・ 福井県での事例



若狭町での養蚕の始まりは1297年（永仁五年）神子浦の百姓が養蚕をしていた記録が残っています。養蚕が盛んになったのは明治になってからで、明治36年に絹織物生産額は福井県が全国1位になりますが、福井県内の繭生産額は、養蚕が盛んな県には遠く及ばずに、養蚕業と織物業が連携することなく羽二重の原料の生糸は他県からの移入に頼り、福井県内で生産された

繭からつくられた生糸は他県へ移出されていました。

福井県敦賀市常宮に鎮座する**常宮神社**社伝ではご祭神の天八百萬比咩命は養蚕の神として上古より鎮座していたと伝わっています。天八百萬比咩命は在地の神であると考えられていて、敦賀市の氣比神宮から参詣を受ける総参祭（例祭）は、氣比神宮のご祭神の伊奢沙別命が常宮神社のご祭神天八百萬比咩命を訪れる神事であることから、氣比神宮のご祭神の姫神様だといわれています。



近代産業先駆けの養蚕が盛んになり、百六十町歩の桑園ができ若狭町十村は【桑都十村】と呼ばれるほど養蚕の盛んでした。十村地区岩屋には明治四一年吉本製糸工場（吉本新喜劇の前身）が建てられ、大正一五年に県立養蚕場嶺南支部が開設、福井県内で二万户を越す養蚕農家がありました。若狭町の**成願寺**は檀家は少しあるものの、この辺りの祈願寺としての役割が大きく十村一帯から参詣者を集め、養蚕講が二月一日三日八日の【火祭り】に、愛宕大権現の本地仏である將軍地藏尊に読経し、お参りした後に將軍地藏尊の護符と馬鳴菩薩の護符を頂きました。馬に乗った將軍地藏尊の

お姿が馬鳴菩薩に似ているからということで、混合されたような形になっています。

## ・滋賀県での事例



滋賀県近江八幡市安土町の織山桑実寺  
藤原鎌足の長男、定恵が白鳳6年（677年）に創建したと伝えられ、寺名の桑実寺は定恵が唐から持ち帰った桑の実をこの地の農家にて栽培し、日本で最初に養蚕を始めたことに由来します。

滋賀県蒲生郡日野町付近では古くより日野絹、日野蚕種の産地でした。村井に鎮座します馬見岡綿向神社、ご祭神の武三熊大人命神は日本書紀に出てきます、保食神が葦原中国に住む月讀尊を供応するため口から食物を出したので怒った尊に殺されてしまい、



死後その体より牛馬、五穀や蚕が生じました。その生じた物（蚕その他）を得て天照大神に奉じたのが武三熊大人命ということで、養蚕守護神として名高い神社でした。

以前は毎年五月初酉を大祭日とし（現在は五月二、三日）、この大祭に先立ち四月十日綿向岳祭りが行われ、神官、巫女、氏子が登山し、山頂の祠前で祭典が執り行われました。山麓に桑の神木があつて、古はこの桑の木の

芽のふき方によって蚕の豊凶を占ったといひます。巫女は登山せず、この神木の前に於いて御湯を献じ、その枝を手折って持ち帰り、大祭当日に神前に奉獻したということです。昭和時代までは蚕神講も組織されて祈祷もされていたということでしたが今現在は養蚕に纏わる行事は残っていません。





木之本町大音集落では、平安時代から始まったという楽器糸がつくられ、昔は芸能が盛んな地域に生産拠点があつたが、現在では全国で七社しか生産していません。そのうち四社は滋賀県内にあり、滋賀県は全国で一番の楽器糸生産量を誇っています。

民間の養蚕信仰に蚕は三味線の音が好きで、門付巡業を主な業とした女性の盲人旅芸人の瞽女の唄を聴かせると桑の食べ方が

違うといわれて、養蚕を生業とする地域から歓迎を受けました。鈴木昭英氏の「瞽女 信仰と芸能」の本に紹介された一説では「このようにして、三味線の奏でる音に異常な力を認めるわけは、その音を発する三味線の糸が蚕の絹糸を繕って作ったもので、同類を呼ぶためであると解釈されている。瞽女が巡業で使い古して切れた三味線の糸が、蚕のお守りとして重宝され、糸の切れっぱしを瞽女から分けてもら

い、蚕棚のすみや蚕かごにしぼっておいたり、蚕の掃き立てや選定に使う箸のつなぎ紐とする風習も見られ、その糸は、瞽女が旅の稼業でさんざん弾いて切れたものでなければ効果がない」と記されています。



滋賀県長浜市木之本地蔵院はお地蔵さんで有名な木之本地蔵院境内には蚕影明神が祀られている。木之本地域の他にあつた祠を昭和になって遷宮したということです。

滋賀県の神社で養蚕信仰が盛んだつたのは犬山郡の多賀大社で、高島や安曇川町等の湖西からも沢山のお詣りがあつたという事です。

養蚕の守り神として宇迦之御魂神を祭日には本殿にお祀りし、二の午の日に養蚕豊作【祈願祭】が平成二十七年まで行われ、養蚕が盛んな時には十一月に【奉献祭】が行われていたといひます。



## ・鳥取・島根の事例



### 鳥取市青谷町絹見 幡井神社

幡屋大明神とも呼ばれていたそうで、主祭神は天照大御神と栲幡千々姫命  
この辺り地名の「絹見」とあるように昔は養蚕が盛んな地域で、今はビワ畑ですが以前は全て桑畑だったそうです

島根県出雲市大社町杵築東出雲大社で養蚕の神様としてお祀りされているのが、氏社二柱の「天穂日命」と「宮向宿禰命」です。「天穂日命」は天照大神の第二子



で、国譲りの使者として高天

原からやってきて、争う事なく出雲で国づくりの手助けをした出雲国造家の御祖神です。もう一社の「宮向宿禰命」は「天穂日命」より十七代名の神裔で允恭天皇の元年に國造出雲臣の姓を賜りました。養蚕、農業、稲穂、木綿、産業の神様とあります。



島根県雲南市大東町新庄の鏡神社境内社地主神社御祭神に素戔鳴命・大己貴命・事代主命・大山祇命。昔は地主権現といわれ牛馬の安全、農耕の利益ありとされ、4月24日の地主神社の祭礼の時に牛馬の護符と一緒に養蚕の護符を領布していた。

## ・四国の事例

徳島県的美馬市やつるぎ町は西日本で有数の繭の産地で、出来た生糸は上質な丹後ちりめん仕立てられたといえます。

徳島県名西郡神山町の大栗神社 古事記にはスサノオに殺されたオオゲツヒメの頭から蚕、目から稲、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆が生まれたと記される。社伝には宜都比売神が伊勢国丹生の郷から馬に乗って阿波国に来て、この地に粟を広めた粟國の祖神として祀られる。





## ・九州の事例

阿知使主により呉から四人工女が向かえられた時に倭国に帰ってきた一行が筑紫宗像大神が工女たちを欲し兄媛を献上。福岡県宗像市大島の宗像大社中津宮には、七夕伝承地といわれる織女神社(織姫)と牽牛神社(彦星)が湧き水が流れる天の川をはさんで鎮座、中津宮七夕祭は鎌倉時代まで遡る。

大分県大分市鴛野に鎮座する敷戸神社ご祭神の坂津免大明神と西寒多大神は兄弟で、鹿と馬に乗りご帰還の折、坂津免大明神の乗られた鹿が当地で足を痛めたので戸板を敷き村人が神楽を奏したので敷戸の地名が付いた。神社境内には蚕神が大正年間に養蚕組合より奉納されています。

見事な石像の蚕神は、福島で女性の守り神として祀られていました淡島様によく似たお姿をしていました。西日本では石像の蚕神を見つけたのは九州だけです。さすがは石文化の九州ならではの光景です。



## 5) 歌でつなぐ蚕への祈り

明治になると国策と位置付けられた養蚕は近代産業化政策下の元に技術的実践が進められ、それまで職人が体験上身につけていた技術や身体感覚を科学的に数値化し明治22年に「養蚕標準表」として公表、東京蚕業講習所や高山社、競進社などの養蚕業の研究や教育機関が創立され、地方各地に巡回教師の派遣や蚕業学校で人材の育成にも取り組みました。しかし科学的に数値化されても、蚕の個体や育てる環境の変化により状況に応じた実践が必要とされ、近代化過程においても前代と同様の経験知や身体感覚を駆使した技術的実践が持続されます。

技術的的身体感覚を養うためには幼少より養蚕の知識を身につける必要性があり、和讃、数え唄、お囃子などで実践上の技術や注意点を歌いながら楽しく知識を身につけるアイテムとして広く普及しました。

福井県で出会いました蚕数え歌や養蚕囃子は、関東から伝わったものが福井の地で培われ、変容し、歌い継がれてきました。八王子に残されています「蚕の歌」と共にご紹介します。

## ・ 蚕数え歌

### 福井に残る「蚕数え歌」

- 一ツセ 人々心ヲ定メツゝヲ飼ヒナサレヨ蚕ヲバ コリヤ蚕ヲバ
- 二ツセ 降モ照ルノモ厭ヒナク気候ハ火力テ加減セヨ コリヤ加減セヨ
- 三 南風ニハ北窓ヲ開ケヨ桑ヲバタヤサズニ コリヤタヤサズニ
- 四 夜モ蚕ハ子（寝）ヌ者ゾ夜中ニ一度ハ桑ツケヨ コリヤ桑ツケヨ
- 五 イツモ桑ノ葉貯ヘテ摘ミダテ桑ヲハ掛ヌヨニ コリヤ掛ケヌヨニ
- 六 ムストコモルトシメルコソ蚕ノ病ノ元トシレ コソモトゝシレ
- 七 何ンデモ香ノヒドイモノ魚鳥焼キクノハイマサンセ コソイマサンセ
- 八 休ミト見タナラ下トリテ薄ク廣ケテコ葉セメヨ コソ葉セメヨ
- 九 蚕種ヲ第一撰バンセヨキモ悪キモ種次第 コソ種次第
- 十 留メ桑スルノハ一分起九分起キフリ葉シナサンセ コソシナサンセ
- 十一 一度眠リニ掛ルマデ毎日廣ゲテ下取ラズ コソ下取ラズ
- 十二 二眠起キ下眠リ下二度ト蚕下ヲ取バヨイ コソ取レバヨイ
- 十三 三眠起キテ葉盛リタント食ハセテ虫作レ コソ虫作レ
- 十四 四眠起キカラ枝葉ヲ蚕下ハ毎日トラサンセ コソ取ラサンセ
- 十五 御注意届ケバー一枚ノ原種テ一石五斗以上 コソ一石五斗以上
- 十六 蠟燭ランプヲ燈シタラ消時持出セ蚕室ヲ コソ蚕室ヲ
- 十七 室ハ東ト南向キ西向キヤ夕日ヲフセガンヤ コソフセガンヤ
- 十八 八畳一間テ一枚ノ原種ハタノ（畑野）ハ廣イモノ コソ廣イモノ
- 十九 葉ノ切り様ハ虫ノ寸休ミ前ニハ細クセヨ コソ細クセヨ
- 二十 日本ノ光リガ外国ニ輝ク生糸ハ養蚕カラ コソ養蚕カラ

### 八王子に残る「蚕の歌」

- 一つとせ 人々蚕を掃き立てて 養いなされよ 親切に こりゃ 国のため
- 二つとせ 降るのも照のもいとわずに 気候は火力で 手作りやんせ こりゃ 加減して
- 三つとせ 南と北には通い口 東と西とは 蚕棚 こりゃ 相向かい
- 四つとせ よそを加減は朝薄く 昼からだんだん 厚掛けに こりゃ 夜桑まで
- 五つとせ 何時も桑の葉貯えて 採りたて桑をば 与えるな こりゃ 用意して
- 六つとせ 蒸ともると滑るとは 病のもとだよ 空気ぬき こりゃ 天井へ
- 七つとせ 何でも臭いは悪いもの 硫黄煙草に 唐からし こりゃ 禁じます
- 八つとせ 休みとみたら蚕尻取れ ほっちに広げて 清らかに こりゃ 降り桑よ
- 九つとせ 蚕飼（小飼）い網戸で生成し 冷度はくわずに 動かずに こりゃ 遅れます
- 十とせ 留め桑するのは皆休み 眠らぬ網蚕は 網を掛け こりゃ 取り捨てよ
- 十三とせ 三眠起きたら湿気強し 蚕尻に不潔の ないように こりゃ 注意せよ
- 十四とせ 四眠起きから 枝桑よ 蚕尻は毎日 二面ずつ こりゃ 大丈夫
- 十五とせ ご注意とどけば一枚の 原紙で一石五斗以上 こりゃ 大うけあい

十六とせ ロウソク カンテラともしたら 消すには持ち出せ 蚕室を こりゃ 怠らず  
十七とせ 室は東に南向き 西は夕日を防がんせ こりゃ 工夫して  
二十一とせ 一に人手間二に蚕種 三に桑 四室 五は機械 こりゃ お供えよ  
二十九とせ 国の富強を願うなら 蚕を無病に 養えよ こりゃ 大切に  
三十とせ 盛んに蚕を養うて 人々富めるは 国の富 こりゃ お目出たや

八王子のは30番までであるのに対し、福井の数え歌は20番までしかありませんが、八王子の20番目以降がどういう歌詞なのか分からず、なぜ10番もの歌詞を減らしてしまったのかは分かりませんでした。もう一首違う蚕数え歌も福井には残されていました。

一ト人々はげめよ養蚕を国の安楽の家の守  
二ツ濃中（はたなか）共同一致すりゃ十年平均十分作  
三 三度（タビ）蚕の蚕飼ヲする内に春秋蚕は益多し  
四 良き種選んで飼育せよ一種 二室 三飼育  
五 撰んだ蚕種を寒夜（弱）わし病毒塵芥よくのぞけ  
六 むりにかわかし焦居すな一月二月中に四十度に  
七 中の温度をためすには水銀寒暖計ハ危険ナリ  
八ツやをツは桑がつばくろの口をあへずに種を出せ  
九 此時蚕種を五十五度に二週間目に七十五にて寿をきせよ  
十 鳥の卵をかへすよに日毎夜毎に注意せよ

## ・養蚕囃子

福井市では蚕数え歌の他に養蚕囃子が豊穰を祈願する「睦月神事」で神事芸能の一つとして神社で奉納されています。

### 加茂雷社睦月神事祭詞集成国山の正月神事 蚕飼（こがい）のはか

春が来たりなごえ ひのきのおまけに 杉の葉をつむつむ 杉の葉をつむつむ 美濃紙も  
千束（ぞく） 丹後紙も千束 播磨紙も千束 三千束の紙をば 蚕種（こだね）紙と定  
め 美濃の国の蚕種は 聞くからに良いとの 丹後の国の蚕種は 取るからに良いとの  
播磨の国の蚕種 あおむから良いとの 飼女（かいめ）のはぶじょう 左のわきに 三日  
（さんにち）三が夜 あたため給うよ 右りのわきに 三日三か夜 ぬくとめ給うよ 取  
り出して見たれば 秋田のごとくに 出そろい給うよ 空立つつばさの おんどりの名を  
ば なにとや申す 太夫（だいふ）と申す めんどりの名をば 小夫と申す 太夫と小夫  
との 一の羽をさしよけ 二羽をさしよけ 三の羽をしょうじて 一羽はけば 黄金（こ  
がね）のふたに 千ぶたに余る 二羽はけば 白銀（しろがね）のふたに 二千ぶたに余  
る 三羽はけば 三千ぶたに余る しい（獅子）から起きては しんじつ増すよ たき  
（鷹）から起きては たきくい増すよ ひな（舟）から起きては ひなくい増すよ 庭か  
らおきては 庭くい増すよ 四たび起きふし なにのうや くせのう わたらせ給うよ  
わたらせ給うよ 買いや買うての しょさには 糸まゆも千石 綿まゆも千石 種まゆも  
千石 三千石のまゆをば 買いやとらせ給うよ かきやとらせ給うよ 加茂や河原の 石の

や多さ まゆのや固さ これより王城の 岩根の市の 市もり長者の 一の姫君は 糸ひき上手 二の姫君は 綿かけ上手 三の姫君は 糸くり上手 おうおい君は へまきが上手 おうおい君は あや織り上手 あやのもんには ひしがた 月がた日がた 雲にかけ橋 かすみに かりがね かようなる もんをば 織りやとらせ給うよ 織りやとらせ給うよ みたちへ戸帳に 熊野へ戸張に なお残れるを わがこの当所の 近所がらんに

## 大森地区 睦月神事 蚕養囃子

やら たのし よふかれ ことしの年は 年よし世よし 蚕養（こがい）よしなこで 正月ノ月をハ た良月（太郎月）と申の 二月ハ如月 きさらぎの初午 四日は善い日 よき吉日をは 撰み定め玉の 美濃国へ聞こゆる 上々も千丈 とふじゃう（当上）も千丈 すひはらも 千丈 三千丈ノ紙をハ 蚕い養（かいめ）の母に 給りけるとの かひめ（蚕養女）のはゝハ 世によろこふで こた子紙（子種紙）と稱る 加賀の方の子た子ハ 取るから（取り柄）吉の 越前方のこた子ハ かうから（飼う柄）よしの 大味方（近江方）のこた子は 大江方（近江方）てあをて（合うて） 只一日夜の さらりと出での 是より東 南の表（正面） けんけひ ほろろ（雉山鳥の鳴き声） 雄（おんどり）の名をハ 大の（延）ぶと申の 雌ノ名ハ 小のふと申の 大のぶノ風切り しゃうのぶのかぎ切 なで取り玉ふて 小はき羽根と志やうす（頌する） 一ト羽根はけば 古金（黄金）の蓋（単位）に 千ぶたにあまる 二たは子はけバ 銀金（シロガネ）の蓋 二 貳千ぶたにあまる 三千ぶたにあまる きんふたにあまる かひめのはゝハ 世に悦ふで 桑付をしょうする 是より東シ 千丈が桑はら 万丈かくわ原 高き木の梢を 撫取り玉ふて 雨桑も嫌はす 甘桑もぞふうぞ 露桑もゾウ々 アゝ ぞふ々と 此ごせ（子勢）達の 桑喰音は 甲斐の国へ聞ゆる 白駒が千疋 黒駒が貳千疋 三千疋ノ駒をハ 泉が谷に 分け入り給ふて 草喰たると 此ごせ達の 桑喰たるは まが（紛）わぎに（似）けるとの たがわぎ（違わず）にけるとの かミから起きて（蚕の一眠） たき子（二眠の蚕）へのぼる たきから起きて ひなご（三眠の蚕）へのぼる ひなから起きて ひんだん（品段）よ（良）しの にハこ（庭子、四眠）へのぼる 庭からおきて 人間よしの 四たひの臥せ起き 何のやくせの 起きや揃ハせ玉ふの 昔の君の たからの君の 拾貳軒の馬屋へ 拾貳の駒をハ 分け入れ玉ッて（給うて） とのり（舎人）を いての 板打ちならし 草喰たると 此ごせ達の 桑くふたるハ まがわぎにけるとの たがわぎにけるとの このくわ喰ての 高ゆめ（夢）上りて 仕たるやしゃうさ（所作）ハ かんも（加茂）や河原 かつら（桂）や河原 石のやおう（多）さ 石のや数サ 糸まへ（繭）が千石 綿まへが貳千石 三千石のまへをハ かひめの母ハ 世に悦フて 風をそよとかうての 是より南二 大和の国ノ 一盛長者ハ 三人 君を 持たりけるとや しゃくし（嫡子）の君ハ 綾織上手 中の君ハ ほまき（縦巻、縦糸張り）か上手 弟子（末っこ）の君ハ 糸引上手 十二ノ火がま（釜）を ぬりやならべて ぬり（ぬるく温める）や続けて 弟子ノ君に 糸を引して 御覧すれハ 春降雨の 板屋（柿茸屋）にさらり くずや（茅茸き屋）のひと々 降るか如くに 引たりけるとや たっ（断つ）たりけるとや 深山の奥な 千さひ（千歳）かつら（桂又蔓） 万さひかつら 本打ちそろへ 末打はら（祓）へ クルクルクルット 大ぐり（大繰）上げてハ 引たりけると

や たったりけるとや 中の君二 へまきをまかせ しゃくしの君に 綾を織らせ 織して 御覧すれハ かやうのものにハ 何とや申ス いわひ久敷 鶴に亀とや 松に竹とや 岩にこけとや しゃこ (シャコガイ) にへそとや かやうの紋をば 折 (織) やつけさせ 大明神の 御前へのめんちやう (面帳) へ 掛てまいらせ あまりしきな ひぢりこ (肘綿) も もちりこ (もじり絢) ふも 一折一折と 折いれて たゞみ (畳む) 入れて 大明神の いのい (戌亥) のすみ (隅) へ 積ンたりけるとや 万さひ楽とや

福井市大森の賀茂神社 (現公民館) で行われます睦月神事には、養蚕囃子だけでなく、神事の習俗にも沢山養蚕に関わる仕草が伝わり、集落で養蚕がいかに重要であったかが伺い知れるものとなっています。



子供達の頭には真綿が詰められた紐で冠が乗せられ、先端には真綿が見える。

神輿に乗せられた大玉には縁起物が沢山描かれています。



大玉を棒で叩き割るのは、繭の糸口を探し、沢山の糸を繭から取り出す仕草を真似ています。



大玉に描かれた鯉の目を持って帰ると蚕が当たるといわれ、養蚕業が盛んな頃は大変な奪い合いになり、祭事を取り持つ氏子と養蚕農家の攻防戦が盛大に繰り広げられたといえます。



現在は「楸餅」と呼ばれています。神饌のお餅、昔は「桑」の字があたり、餅の真ん中には桑の木が通されていました。

## 6) まとめ

関西の養蚕信仰があった神社仏閣を巡って気づいたことは、寺院では江戸時代以降に蚕種や養蚕技術の導入によって、関東の方から馬鳴菩薩や金色姫が蚕の神仏として布教されるようになります。それに対して神社では関東のように養蚕に特化した神様を勧請するのではなく、元々祀られていた祖神が蚕神の役割を担っていることが多く見受けられる。それは関西には養蚕が盛んになった江戸時代よりも以前に、蚕神や織姫を祀っている神社が存在していた事により、得てして蚕神を他所から勧請する必要がなかったからなのではないかと推測できます。

また養蚕・製糸の地域性としては三丹地方（丹後・丹波・但馬）、北陸地方、滋賀県北部、岐阜県美濃地方、長野県などは、夏蚕優勢地域で、夏蚕の糸は丹後ちりめんや浜ちりめんといった織物の横糸には有効な生糸であったため、加温して育てなければならない春蚕よりは格段に育てやすく、春蚕が病気などで全滅しても桑さへあれば、夏蚕、秋蚕で収入を取り戻すこともできた。こういう状況もあり、春蚕優勢地域とは違い、養蚕の収穫が博打のような不安定なもので、生活が困窮するという事も少なく、農耕や漁業といった、人の営みの産業としての生活の祈りの中に、蚕の祈りも集合していたのだと思います。

## 参考文献

### 文献

福井県立博物館紀要第3号(1989)『国山の正月神事』

清水町教育委員会／編 [清水町教育委員会1990] 加茂雷社睦月神事祭詞集成

鈴木昭英 「信仰と芸能」高志書院 1996

福井県史 資料編15 民俗 福井県庁

千田九郎助家文章 若狭町立図書館所蔵

田村均 講演「近代の養蚕・製糸と勝山」ゆめおーれ勝山 はたやフォーラム

### 参考資料

西陣織工業組合/西陣会館 <https://nishijin.or.jp/whats-nishijin/history>

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 <https://ja.wikipedia.org/wiki/秦氏>

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 <https://ja.wikipedia.org/wiki/東漢氏>

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 <https://ja.wikipedia.org/wiki/弓月君>

日本大百科全書(ニッポニカ)コトバンク <https://kotobank.jp/word/漢織・呉織-1501427>

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 <https://ja.wikipedia.org/wiki/丹後ちりめん>

りめん

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 <https://ja.wikipedia.org/wiki/浜ちりめん>

めん

池田市ホームページ <http://www.city.ikeda.osaka.jp/shisei/gaiyou/donnatokoro/1418636130051.html>

1418636130051.html

### ご協力

八王子教育委員会

西陣会館

若狭町立図書館

取材に協力していただきました各神社仏閣の関係者様、養蚕関連の博物館、民俗資料館の関係者様

ありがとうございました。